

反抗期の親子関係

——一歳から三歳までの縦断研究が教えてくれるもの——

高濱 裕子

ある学会で、「反抗期における親—子システムの変化」というタイトルのポスター発表をした。何人もの参加者から「これは思春期の研究ですか？」とか「この反抗期は第二次反抗期のことですか？」という質問を受けた。予想外の反応に戸惑ったが、今の日本では中学生や思春期の子どものさまざまな問題に関心が集まっていることを改めて感じさせられたのである。

私と共同研究者の関心は、生後二年目頃から始まるといわれる第一次反抗期にある。この研究は、第一子の子どもとともに親をも研究対象にした点が特徴であろう。

反抗期の親子関係を検討する目的

この時期の親子関係を検討する目的はふたつある。第一に、親—子システムがどのように変化するかという点

である。子どもの誕生以降、親は子どもとのかかわりを通して経験と勘とをたよりに関係を構築してきた。しかし、ある日突然始まる子どもの強い「イヤ！ イヤ！」や「自分で！（と親の手を振り払う）」に直面し、親はそれまでのやり方が通じなくなったことを感じる。これは安定していた親子システムが、子どもの発達的变化によつて不安定になったことを意味する。不安定になったシステムはどのようにして安定を取り戻すのだろうか。

日本では、子どもの自己主張が積極的に方向づけられないようだ。幼児期の自己主張・実現面の発達は四歳頃をピークに停滞や後退を示すのに対し、自己抑制面は年齢とともに伸長してゆく（柏木 一九九八）。ということは、反抗期は親に抑えこまれて収束するのだろうか。

第二には、親子システムの中で何がおき、どんなことが進行しているかという点である。育児書の解説には、「だいたい三歳を過ぎるとききわけが出てくる」とか「理解力や言語の発達によつて、自分を納得させる力

が育ってくる」とある。しかし、この変化のプロセスを具体的に示すデータはほとんどない。

電話による育児相談の内容を参照すると、一歳半頃までは発育や健康に関する内容が上位にある。ところが二歳を過ぎるとしつけに関する内容が上位を占め、それと同時に子どもがなかなかいうことを聞かないことに悩む親が出てくる。

この変化は、子どもが生地のまま自分を表出することに対して、親が積極的に介入することで引き起こされる。これは通常「社会化」と呼ばれ、子どものさまざまな要求やふるまい方をその生まれ育つ社会や文化に受け入れられるような形に方向づけることをさす。子どもの反抗や自己主張が強まっていく中で、それらを考慮しつつ社会化を実践することはそうたやすいことではない。

反抗期についての親の認識

まず、どのくらいの子どもたちが反抗期にいるのだから

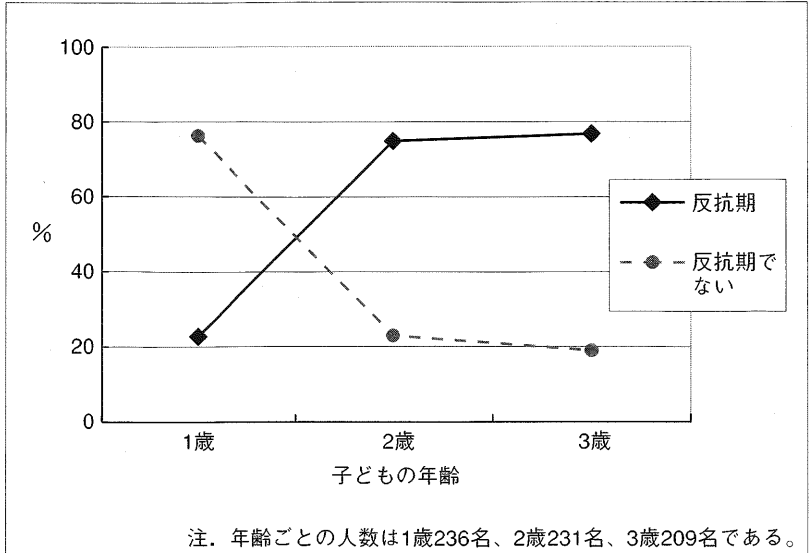
うか。図1は、年齢ごとに子どもが反抗期にいるか、反抗期にいないかを大雑把に分類した結果である。一歳では反抗期と認知された子どもは約二割であるが、二歳と三歳では八割近い。つまり二歳以上になると多くの子どもが反抗期にいと親に認識されるのである。

反抗といっても子どもによる個人差が大きいことは、二人以上の子どもを育てた経験のある人ならわかるだろう。また親側の受けとめ方の個人差もある。さらに子どもは四六時中反抗しているわけではなく、状況にもかなり依存する。図2に子どもが反抗的になる時や場面を示した。このデータは、図1の子どもが二歳になった時点で回答していただいた結果である。

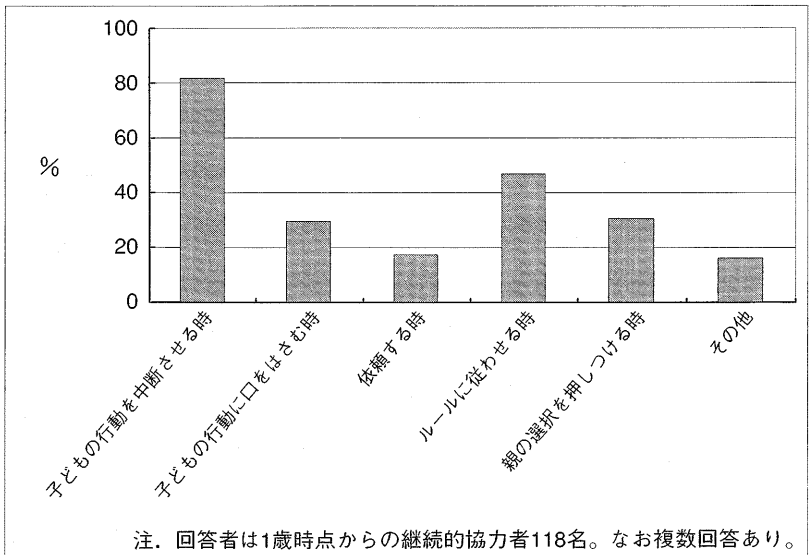
最も多いのは「子どもの行動を中断させる時」で八割の親があげた。次に多いのは「ルールに従わせる時」で約四割、次に三割台で「親の選択を押しつける時」と「子どもの行動に口をはさむ時」が続く。この結果からは、親の意図（こうさせたい・こうさせたくない）と子

どもの主体性（何かをしたい・何かをしようとすること）がぶつかりあう様相が見える。親の都合にあわせることや、親の要求にそのまま従うことから抜け出しつつあることがわかるだろう。

次に、図3（十二頁）の子どもへの反抗に親がどのような感情を抱くかを見ていただきたい。回答者は図2と同一の親であった。最も多いのは「いらだつ」で八割を超えた。次に「腹が立つ」の約八割、「困惑する」と「いやになる」が六割強、「がっかりする」が約二割である。これだけ否定的な感情が喚起されるとすれば、冷静に対処できないという親の悩みも納得できよう。ある特定の感情だけでなく、複数の否定的感情を抱く親が多いこともわかる。一方「うれしい」や「元気が出る」といった肯定的感情も、約二割程度あげられた。このような親の感情面へ着目した研究が少ないことも、私たちには不思議であった。



▲図1 母親の認知した反抗期

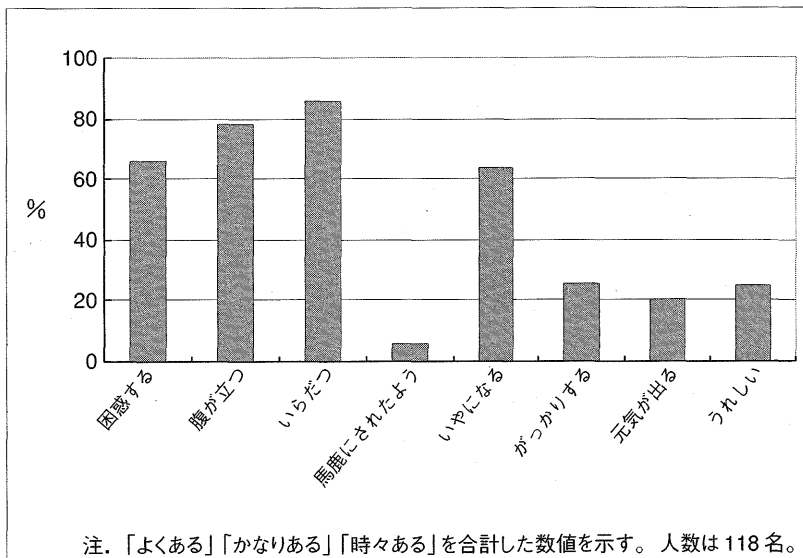


▲図2 子どもが反動的になる時

母親の心理的負担と社会的資源の利用

私たちは子どもが一歳九か月頃から三歳を過ぎるまで、一か月半に一度のペースで家庭を訪問させていた。反抗の始まりの時期や反抗・自己主張の程度には個人差があるが、子どもたちは二歳半前後には強い反抗と自己主張に彩られた反抗期のピークを迎えた。

この時期の子どもの特徴には、声をかけると返事のかわりにまず「イヤ！」という、「一日何十発『イヤ!』」といった気がすむんだらう?」というものがあつた。食事や片づけをめぐる激しい対立、外出先の売店で初体験したおもちゃをほしがって地団駄ふむ子どもとの格闘、入浴させたい親と好きなビデオに執着してそれを拒む子どもとのバトル、一旦機嫌を崩すと泣き叫び收拾がつかなくなる子どもとの葛藤など、母親の語るエピソードはリアルであり、それだけに混乱や苛立ちがひしひしと伝わってきた。戸外に出れば親子ともに気分が変わる



▲図3 反抗期の子どもに親が抱く感情（2歳）

のはわかっていたが、「この子がまたよその子に手を出
すんじゃないかと思うと外出できなかった」と話す方
や、「親のいいなりになる子どもなんて気持ちが悪いと
思っていたが、こんなにすごいものだったのか」と語る
方もいた。「どれほど苦悩したのだろうか?」と、話を聞
かせていただく私たちも胸が痛んだ。

多くの母親は子どもが成長したと感じるエピソードも
教えてくれたが、こちらは積極的に評価しない。反抗や
自己主張が強すぎてかすんでしまうのだろうか。おそら
く、母親の知覚は気になることに焦点化されるため、他
の側面（特に肯定的な側面）があまり感知されないのだ
ろう。

この研究では、親子をとりまく環境（さまざまな資源
といかえてもよい）も視野にいれた。例えば夫婦関係
や、親戚や友人に代表される社会的資源との関係であ
る。そこで明らかになったのは、子どもの自己主張や反
抗が強まるにつれて母親の心理的負担が増大するが、多

くの母親が社会的資源を利用しながらその負担を軽減さ
せていったことである。中には保育所の保育士のアドバ
イスが有効に機能したケースや、それまであまり育児に
かかわらなかつた父親がわが子の強い反抗に巻き込まれ
てかわるようになったケースもあった。

生物が生存するためには、周囲の環境（生態学的ニッ
チ）を利用するだけでなく、環境の変化に応じて利用の
仕方を変えていくことが必要である。気温や湿度に対応
したミミズのアフオーダンス(Reed, 2000)はよく知られ
た例である。ミミズと人間を同等に扱うのはおかしいと
いわれそうだが、生物である以上適応戦略としての行動
に差異はない。母親たちは周囲の資源を上手に活用し、
わが子の反抗期に適応していった。

反抗期の子どもと親の共変化

三歳近くになると、反抗のための反抗やわけのわからな
い反抗は減少するようだ。その背景には、二語文や三語

文といった言語の発達、あるいは記憶や理解の進展にみられる認知発達の影響がある。親の方でも「理由があつていやがつているんだ」とか、「どうして?」と聞くわけを話そうとする」というように子どもの変化に気づく。しかも、その変化に上手にのつて対処できるようになる。このようなかかわりが、さらに子どもの言語発達を促進すると考えられる。

激しい情動反応を示す子どもに、否定的な感情を抱く母親がいた。何を訴えているのかつかめず、しかも激しい泣き叫びをなだめる方法もみつからなかった。ある日「ママ、大好きなの!」と発したことに、初めてわが子の心情を理解した。抱き寄せて「ウン、ウン」とうなずきながらなだめたという。この時期の子どもは一時的に分離不安が強くなり、親に依存的になることがある。母親は自分から離れても大丈夫な子と思っていたが、実はそうではなかったのである。

自分自身の感情をコントロールすることの難しさを訴

える親も多かった。「私が感情的になると、子どももワーツとなつて叫ぶ」という。反抗期の子どもという刺激から目をそらすような対処を心がけた親もいた。そばについているとイライラするので「先にお風呂にはいつている

わよ」と声をかけ、遊びをやめない子どもから離れるようにした。その結果、子どもは納得して自分でけりをつけることが親にもわかつてきた。

これらは極めて重要なポイントを示している。親が子どもの変化にあわせて自分自身の対応をふりかえり、あるいは見直し、親行動を修正していった結果なのである。この変化とともに、「子どもとのやりとりがとても楽しくなった」と報告する親が多いことも印象に残った。子どもの変化に適応できない時、親側にも子ども側にも不都合が生じることは、多くの臨床事例が示す通りである。

反抗期は子どもの自我発達にとって重要であり、養育



者はむやみに抑えつけてその芽を摘みとってはならないといわれてきた。しかし私たちの研究からは、子どもと親の双方にとって重要な時期であることが明らかとなった。この時期はそれまで培った親子の関係を再組織化しなければならず、それが親にとっての難しさを生み出すと考えられる。

まとめにかえて

家庭では親子が一对一で対峙する状況が多く、一旦閉塞状態におちいるとそこから抜け出すことが難しい。

一方大勢の子どもがいる保育の場では、そのような状況におちいることは少ないだろう。しかも保育者は、反抗や自己主張の背後にある子どもの意図を適切に読みとることができると推測される。専門職の保育者が子どもの意図を推測することは当然かもしれないが、親にとっては案外難しいのである。

私たちの研究から、保育者の社会的資源としての役割

の重要性が示唆された。大人と子どものかかわりのひとつのモデルとして、遊びの中で発揮される子どもの多様な姿の紹介者として、あるいは子どもとのかかわりの楽しさや豊かさを伝えてくれる専門家としての役割を再認識したい。これらは保育分野が長年蓄積してきた成果であり、非常に得意とする面でもある。親子にとっての「地域の利用可能な資源」というとらえかたは、親側の選択肢の幅を広げるためにも必要であろう。

(お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター)

引用文献

柏木恵子「幼児期における「自己」の発達―行動の自己制御機能を中心に」東京大学出版会 一九九八

エドワード・S・リード著 細田直也訳 佐々木正人監修『アフォードランスの心理学―生態心理学への道』新曜社 二〇〇〇